

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒 207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
<http://www.yumuyu.com/>
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第 39 号

毎月発行

創刊 2015 年（平成 27 年）8 月 16 日 日曜日

2015 年（平成 27 年）8 月 16 日 日曜日



浄林寺に到着した笑い仏さん

笑い仏さん 福島への行脚 第20回(最終回)

3年を費やしついに最終目的地の
福島県双葉郡富岡町浄林寺に到着
盛大に開眼法要開催される 8/6

（寄稿） MONKフォーラム代表
平原憲道・長谷川稔氏

費やした日数は千百五十
九日（三年三か月）。逗留
させて頂いた寺は二十一カ
寺。ぎつしり埋まった芳名
帳が七冊。そして、お集ま
り下さった皆様は約百五十
名。開眼法要を前にしての
笑い仏さんにちなんだ数字
たちです。

行われる施餓鬼法要に合わ
せて、開眼法要と共に笑い
仏さんのお迎えをして頂け
ることに決まったのが先月
のこと。このお寺は福島第
一原発事故後の避難指定地
域に当たり宿泊ができない
ため、檀家さんも別の場所
に避難し不自由な暮らしを
強いられています。その皆
さんがお盆に一堂に会し、
ご先祖様と繋がる大事な法
事が施餓鬼供養です。そん
な重要な日に「ヨソモノ」
の我々がお邪魔してよいも
のか…という不安は、我々
を出迎えた百五十の笑顔で
一気に杞憂となりました。

法要は十時に開始。張り
のある声で集まった檀家さ
んを鼓舞しながらも、漫談
のようなユニークな語り口
で味わい深い法話をされる
のが早川住職です。遠方か
ら来た我々 MONKフォー
ラムを丁重に労いながら、
私に笑い仏プロジェクトの
経緯説明を促し、山本竜門
仏師に思いを尋ねる様子は
正に名司会でした。

笑い仏さんが終の住処に
到着したというニュースは
複数の現地メディアに取材
されました。福島放送局に
は当日の夕方のニュースで
放映して頂き、福島民報に
は二日後に大きな記事にし
て頂きました。三年間の旅
路において新聞やラジオな
ど多くのメディアに取材さ
れましたが、やはりゴール
の地における取材には感慨
深いものがありました。



勢ぞろいで記念撮影



開眼法要に集まった方々

旅を始めた三年前には最
終目的地の寺はおろか次の
逗留寺しか決まっておらず、
成否すらも不透明なプロジ
ェクトでした。「福島へ笑
顔を届けたい」という関係
者の強い思いだけで歩き始
めた笑い仏さんは、我々の
予想を超える縁を繋げなが
ら、皆に運ばれ、遂に永住
の地へと到着したのです。

合掌
浄林寺
福島県双葉郡富岡町
下郡山下郡 26
訪れる際にはお電話を
0240-22-3492
(MONKフォーラム代表
平原憲道・長谷川稔)



JR 富岡駅跡

福島一富岡町・楡葉町レポート ①

除染も順調に進展、線量も大幅に減少、住民はすぐにも帰還が可能だというが、しかし、現実の状況とはこうだったのだ

【現地取材の連載レポート その①】



JR 富岡駅跡 何もない

九電・川内原発の再稼働ニュースだけなのか？

最近、九州電力・川内原発再稼働のニュースばかりが取り上げられ、福島第一原発関連の話題はすっかり影を潜めている。

あれだけの規模の人的災害なのだから、どんなに時間が経過しようとも、一定の間隔を置きつつ、現地の詳しい状況を「定点観測」する姿勢があっても当然だ。しかし、テレビメディアを中心に、移り気なマスメディアは、次から次へと新

しいニュースに飛びつき、未解決の災害を忘れている。こうした状況を踏まえつつ、筆者は、当新聞で連載していた「笑い仏さん」の終着点である富岡町の浄林寺取材を兼ねて、八月五日と六日、福島県のいわき市から車で広野町、楡葉町、



ここから富岡町 除染案内看板



慰霊碑

いわき市では大震災の痕跡は消えていた

いわき市の市街地には、

富岡町を取材した。今回号から、写真を多用し、数回に分け、臨場感ある現地取材レポートを実施しようと思う。

大震災の痕跡はすでになかった。ＪＲいわき駅からの目抜き通り両側の歩道では、翌日の七夕祭りの準備が始まっていた。全国のどこでも見られる夏祭りの準備風景がそこにあった。筆者は身構えて取材を開



JR 富岡駅跡近辺の立て看板

走行注意

町内全域で、陥没段差箇所(片側通行)があります。又、野生化した動物が出没する恐れがあります。道路状況をよく確認し注意して走行して下さい。

富岡町

野生化した動物に注意！

福島第二原発を見ようとしたが・・・

富岡町への入り口で除染看板を見た。一挙に緊張した。パトカーもひっきりなしに走っている。写真撮影をしていると鋭い視線を投げかけられた。

少し行くと福島第二原発入り口の表示。第一原発は無理でも、第二原発なら近づけるかもしれないと思い、右折。しかし検問で止められ、戻らざるをえなかった。富岡町では全体としてピリピリした感じが伝わる。



福島第二原発 検問所の表示



福島第二原発入り口看板

四年半前の大震災直後のまの富岡駅周辺

それならばと、別ルートで第二原発を見られる場所を探して海の方に向かった。途中、野生化した動物に注意を呼びかける看板も見た。幸いなことにそうした動物に遭遇することはなかった。

駅跡近くの「元」商店街だった。大震災からもう四年半が経とうとしているのに、時間が逆戻りするような強烈なめまいを感じた。そこには大震災直後の壊れた店舗と家屋があった。ひっくり返ったまま放置された車や、津波で家の中に流れ込んだきた車もあった。線量が高いために、人の立ち入りが禁止され、復旧作業が出来ず、放置されたままだったのだ。

除染真っ最中のエリア

しばらく無人の荒れ果てた建物群を見ていたら、急にひどい無力感に襲われた。そうなのだ。ここは除染作業真っ最中の危険エリアなのだ。あらためてそうした現実に向き合った。いわき市街から、わずか四十キロほどしか離れていないのに、そこは緊迫した別世界だった。福島第一原発からの距離のわずかな違いで、片や大

震災の痕跡もなく、平安な暮らしがあるのに、片や除染が不可避の人の住めない地域で、大震災直後のまま固定してしまった場所。

あまりにも残酷な現実がそこにあった。

車両が多いが無人の街

六号線は除染物質を運搬



壊れた店舗



真っ二つに折れた鉄柱



壊れた家屋



壊れた本屋



壊れた家屋



壊れた店舗

するトラックや工事用車両、工事関係者を乗せたバス、パトカーであふれかえっていた。信号が赤になると、渋滞の列が五十メートル

ルにもなった。そこだけを見ていると、活気のある地域である。しかし、住宅地に一歩足を踏み入れると、「無人の

街」が広がっている。人っ子ひとりいない。動物もない。この感覚的に受け止めたたいギャップに、めまいを

通り越し、吐き気を覚え、またひどく混乱した。

―― 続 ―



家の中に入ったままの車



ひっくり返ったままの車

第 14 回三陸酒海鮮会日本橋開催（7/30） 福島県いわき市で幻の「写楽」に出会う（8/5）



幻の写楽

第13回・三陸酒海鮮会・日本橋開催は7月30日、水天宮前駅近くの「ささや」で開催されました。猛暑のなかにもかかわらず多数のご参加をいただきました。この会に初めて外国人が参加し、大いに盛り上がりました。フランスの方で、地酒に大変詳しい方でした。次回は暑い夏をスルーして、秋口の10/8（木）の開催です。

8/5の夜は、「笑い仏さん」取材の関係で、福島県いわき市で顔合わせを兼ねての飲み会。「夜明け市場」のなかの「gohoubi」というお店で一次会、お隣で二次会となりました。一次会では、まずは「みちのく福島路ビール」の「ピルスナー」と「レッドエール」をいただき、次はやはり地元の日本酒ということで、最初が「又兵衛」、次に「神谷」、そして「いわき遠野の純米酒」をいただきました。飲み会の仲間との相性が良すぎたのか、二次会まで開催することとなり、お隣へ。お店の外に、何と「写楽」の一升瓶が並んでいたことを目ざとく発見。早速、「写楽」を置いているか聞く。何とあるというではないか。なぜ筆者がここまで「写楽」に驚くかというと、実はこの「写楽」、昨年の日本酒のナンバーワンを決める品評会「サケコンペティション」において、純米酒の部での「写楽 純米酒」が1位に選ばれ、かつ純米吟醸の部でも「純米吟醸 備前雄町」が1位を獲得した。醸造元は宮泉銘醸（福島県会津若松）。いうまでもなくおいしかった。昨年から売り切れ状態で、幸運な出会い。最近、福島酒の地酒は大評判です。ロンドンで開催されたワインコンテストでも、「会津ほまれ」の純米大吟醸酒が「チャンピオン・サケ」になりました。

がんばれ、福島酒の地酒!!!



東北の地酒ラインアップー日本橋開催



「三陸鮭とトマトの簡単料理」（完成）

第12回 水産業再興のための料理レシピ紹介

【ホヤ丼】と 【三陸鮭とトマトの簡単料理】



郷土料理愛好家
松本由美子氏



「ホヤ丼」（完成）



鮭の切り身



三陸鮭とトマトの簡単料理
準備段階



酢飯に乗ったホヤ



ホヤの切り身

【三陸鮭とトマトのレンジで簡単料理】

トマトのうま味と玉ねぎの甘みが、サケとコラボして大変美味しいです。レンジで手軽にチン。(夏バテ予防と美肌をつくるトマトを脂がのったサケで食べつくす)

三陸沖のサケを利用して、夏はトマトを食べよう～

―― 作り方 ―

生さけ 2切れ(160g)、塩、コショウ 各少量、かたくり粉 大 1
玉ねぎ 小1/2(80g)、酢 大1、サラダ油 小1、塩 小 1/4

① さけは一口大のそぎ切りにして塩、コショウをふり、かたくり粉をまぶす。玉ねぎは薄切り、トマトは5mmの厚さの半月切りにする。

② 耐熱皿2枚にそれぞれ玉ねぎを敷いてサケとトマトを並べる。酢大1、油1、塩1/4を混ぜ合わせてかけ、ふんわりとラップをかけて電子レンジ(600W)で1人分ずつ2分加熱する。ワインやビールにも大変合います。

酢飯にホヤが乗った【ホヤ丼】

海のパイアといわれる「ホヤ」。磯の風味が強い独特の味がするホヤですが、好き嫌いが極端に分かれます。酢の物や刺身が一般的な食べ方ですが・・・食べ方の範囲を広げて、沢山消費をして貰おうとレシピの拡大を試みました。炒めたり、てんぷらにしたりした結果、どれもいまいの味・・・やはり、本来の新鮮なまま味を損なわずに食べるのが一番美味しいのではという結論になっています。そんな中、酢めしにホヤを乗せた「ホヤ丼」はなかなかいけます。

ー 酢めしの作り方ー 米 2合 酢 大 4 砂糖 大2 塩 小 1 酢めしをつくる

一次に、青しそ、きざみのり、あさつきなどをのせて丼にしてみました。(合わせ調合酢など)

ー最後は食べやすい大きさにカットしました。

いわきで見聞きして 考える 震災復興の現在

「笑い仏」さん、 ついに福島へ

「笑い仏」さんがついに、3 年余りの旅を終えて福島に到着した。福島第一原発から直線距離で約11kmの場所にある富岡町の浄林寺がその最終目的地である。8 月 6 日にその開眼法要が営まれ、檀家の方々を中心に、約150 名の方が集まった。恐らく今号では編集長の砂越さんや MONK フォラムの平原さんがその模様を詳細に報じておられることと思うので、ここでは、震災発生から4 年5 月が経過した現時点での復興について、いわきで見聞きしたことを基に、改めて考えてみたいと思う。

「記憶の記録 プロジェクト『田』」

私は、仙塩地区の医療・

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.otomo

の人や、この地域のこれからの人に伝えていくことはこの上なく重要なことであると思うのである。

いわきで聞いた 震災のこと

この「記憶の記録プロジェクト『田』」の活動の一環として、7 月26 日、27 日の両日、「震災復興交流訪問活動 in いわき（田旅いわき）」と銘打って、いわき市内で9 人の医療・介護関係者の方々に震災体験についてお聞きしたが、聞けば聞くほど、現在のいわきの置かれている状況の難しさを感じ知らされた。

いわきはその市域の北端が福島第一原発から30km 圏内にあるために、原発事故の影響を受けたと思われる。事実、震災直後、物資はいわきにはなかなか届かなかった。中通りの郡山までは物資が来ていたが、そこからいわきには当初輸送されなかったのである。やむなくいわきから郡山まで物資を受け取りに行った事例が数多くあった。大手のマスメディアも3 月下旬までいわきには入らなかった。実際には当時の風向きの浜通り南部よりも、中通りの県庁所在地福島や郡山の方が放射線量が高かったというのは大いなる皮肉であった。

いわきは、あまり知られていないことだが、東北で

は仙台に次ぐ人口第2 位の都市である。つまり、仙台を除く東北の他の5 県の県庁所在地の人口をも上回る。同じ浜通りの福島第一原発に近い双葉郡の町村の避難者を受け入れるキャパシティがある都市は、浜通りにはいわきを置いて他にはなかった。もちろん、中通りの福島や郡山、会津の会津若松なども相応に大きな都市ではあるが、気候が違

う。浜通りは住むのに実に快適な地域で、夏は内陸の中通りや会津ほど暑くならず、冬は東北の中で最も温暖で雪もほとんど降らない。こうした浜通りに長らく住んだ人が中通りや会津、ましてや他地域に移り住むには相当なストレスがあったことだろう。

その意味では同じ浜通りの南端にあるいわきは、原発事故から避難してきた人たちにとっては住みやすい場所だったに違いない。それでいわきには2 万人超の避難者に移り住んだ。しかし、そのことが元からのいわき市民との間に軋轢を生んでしまった。片や住み慣れた故郷を離れざるを得なかったとは言え、東電からの多額の賠償金を得ている人たち。片や原発事故の風評被害に苦しみながらも、東電からの賠償は一時金としてほんの数万円得ただけの人たちである。急激に人口が増えたことで、道は朝晩渋滞するようになった、病院の混雑は増した（しか

も避難者の医療費は無料である）、賃貸物件が不足した、保育園の待機が深刻になった、賠償金を元手にいわき市内の土地や家を買われて地価が上がり家を建てにくくなった、かつ避難者の大部分は住民票をいわきには移していないので実質的に人口が増えたにも関わらずいわきの税収はほとんど変化がない、そのような声を聞いた。

「他の地域が同じ目に 遭ったら助けたい」

このプロジェクトの活動をしていてよかったと思う時がある。震災発生から4 年以上経って、震災のことを日常の中で振り返ったり、他の人と話したりという機会を着実に少なくなっている。そうした中で改めて話を聞かせていただくことで、もちろんこちらにとっても様々な気づきや学びがあるが、それと同時に話をしてくれた人にとっても震災当時に思いを馳せ、そこから今に至った経緯を振り返ることで、同じように気づきや学びがあるようであるのである。

避難者を受け入れたことによって生じた軋轢について語ってくれたお一人が、ふと気づいたように「でもそれは本筋と違うよね」と言った言葉がとても印象的だった。何が復興の本筋なのか。避難者同士の境遇の差を論じることが復興につ

ながるのでは、少なくともない。元からいわきに住んでいた人にとっては確かに理不尽に感じることもあるに違いない。しかし、願わくは、そうした彼我の差を乗り越えて、共に手を携えての震災復興を成し得てほしい。

東北第二の都市であるいわきは、いわば浜通りの市町村の「兄貴分」である。2 万人以上もの避難者を一手に受け入れるというのはまさにそのポジションに相応しい、さすがの対応ぶりであったと思うし、先ほど述べた気候風土の点や多くの

の人を受け入れられる余地のある都市規模ということを考えても、他の市町村では同じように対応することはとても不可能であったろうと思う。人口の急増の影響はあるが、多くの市町村で人口減少が止まらない中で人口増を、地域活性化や震災復興のエンジンに据える取り組みへとつなげていく方策を今後考えていければよいのではないかと

思うのである。今回お話を聞きした中のお一人である長谷川祐一さんの言葉を紹介したい。長谷川さんはいわき市内の本拠を置く調剤薬局タローファーマシーの代表取締役として、震災直後県外への撤退事例が相次いだ中でも市内に踏みとどまり、必要な薬を患者に提供し続けた方である。他の地域の人、この地域のこれからの

人に何を一番伝えたいかとの問いに長谷川さんはまず、「僕らの震災は続いている。それを分かっていたら良かった」と前置きした後、「震災に遭った人たちのために働きたいという心ある人たちはいる。心ない人を恨むより、心ある人たちと一緒に復興に取り組みたい」と言った。そして、「他の地域が同じ目に遭ったら、今度は僕らが助けたい」とも言った。今回の震災体験を無駄にせず活かしたい、助けてもらったお返しにそれを活かして今度は他の地域の役に立ちたい、そのように話す人は長谷川さんだけでなく、いろいろな方の口からも出た。被災し、被災から立ち上がるようにしている人に共通の思いなのだと思う。

「常磐線」で見た 震災のこと

そのようなことを考えさせられた「田旅いわき」の翌週の「笑い仏」さんの浜通り入りであった。「田旅いわき」の時は、仙台から東北本線で郡山まで行き、そこから磐越東線でいわきに行ったが、今年1 月末に福島第一原発付近の区間で代行バスの運行が開始され、代行バスを2 回乗り継げば何とか仙台からいわきまで常磐線経由でも行けるようになったので、今回はそちらを利用してみた。

最初の代行バス区間で

る宮城の山元町から福島の相馬市までは、まちづくりに合わせて順調に鉄路の再建も進んでいた。しかし、次の代行バス区間である南相馬市から榎葉町までは、福島第一原発のある帰宅困難区域を通る関係で、常磐自動車道と国道6 号線という幹線道路こそ開通したものの、まちはいまだ再建の緒にすら就いていない。国道沿いの人のいない街並みを見ながら、ひとたびあの事故が起きて、何気ない日常を送っていたこの住み慣れた地を、心ならずも離れざるを得なかった方々の心境はいかばかりだったかと、改めて考えた。

開眼法要で見聞きした 震災のこと

開眼法要が行われた浄林寺も帰還困難区域にあるため、ご住職の早川さんも毎日いわきから車で通っているが、寺の檀家となつてい

るこの地域の皆さんも同様で、普段は様々な地域で避難生活を送っていて、お盆前の施餓鬼法要の折には集まって先祖供養をしているそうである。

開眼法要もその施餓鬼法要の日に合わせて営まれたので、境内や本堂は大入り満員状態だったが、いわき市内はもとより、仙台や首都圏から来た檀家の人もいて、あちこちで積もる話に笑顔の花が咲く様子が見られた。地域のコミュニティ

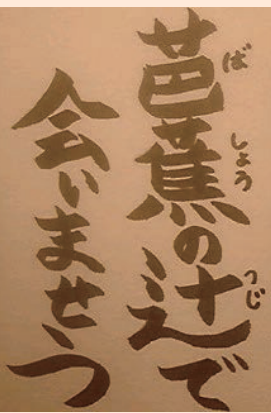
ーに果たす寺院の役割の大きさを実感した。作者の山本竜門さんが、微笑を湛えた「笑い仏」さんについて、「笑顔を見ると笑顔になる。皆さんにたくさん笑顔がもたらされますように」と挨拶された言葉が印象的だった。また、早川住職の「諦めたらそこで終わり。し太く頑張ろう」との言葉も、現状が現状であるだけに身に沁み

た。いわき市内は仙台と同じく、開眼法要が営まれた8 月6 日から3 日間七夕まつりであった。街にたくさん

の人が溢れ、浴衣姿の子供達もたくさん見掛けたが、今回様々な調整の労を取ってくださった左雨弘光さんの「子供達が何も気にせず

にこうして自由に外に出られる日常が本当にありがたい」という言葉には、本当に実感がこもっていた。取り戻せていない日常もまだある。一方で、震災前の通りに戻った日常もある。そしてそこにはそこに住む人の様々な思いがある。いろいろな困難に直面しながらも、その目線は今の先を見ている。まさしく「震災は終わっていない」が、そこからの復興を目指す人は元氣である。そのように実感できた2 度のいわき訪問であった。

連載
むかしばなし



第二十七話
大天狗の都

太白山、といつからか呼ばれる事になる烏兎森。その小さな山の頂に石を積み上げた祠があり、一人の男の「思念」が隠れ住んでいた。正確にはもうかれこれ二十年近くも彼は本来の肉体を失い、ここに囚われの身なのだった。

そこについて一昨年前、遠く北東にある塩竈神の社から一本の強力な霊脈が引かれ、その一直線上ならば、地表の石から石へ飛び跳ねるように意識を移動させて、旅をする事が可能になった。旧き親友・西木戸太郎国衡



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル（ヴァイオリン）担当。

の弟・泉三郎忠衡が挨拶に登山してきて、「大河次郎兼任殿、この結界で奥羽をお守り下され。」と祈願していった。大天狗の子と噂された、平泉の陰の、もとい「真の」後継・戦でも起こるのか？この幽閉の身に頼つても、何もしてやれんぞ。

ところが先日、突如結界上に見た事もない大きな鉄の塊と、同様に大きな木の箱の連なりが出現した。鉄の塊は黒い煙を吹き上げ、木の箱の中には数十の人間がいる・一体、これは何なのだろう？

そして今度は、すぐ北東の夜空を、二体の巨人の背中が覆っている。何かしきりに、口論しているようだ・全く、何という事態か。「次郎：大河、次郎よ：」どこからか、太い声がする。登山してきた人間のものでは

はない、空から降ってくるような、風神か雷神が如き妖気を帯びている。「俺だ。西木戸太郎だ：」「何と！国衡か どこにいる？」「いま真西にある、出羽の千歳山の頂にいる」「何？どういう事だ。お前の声は、逆の真東から聞こ

えてくるが・」 「山に身体を置き、天道を追って世界を回転しこへ着いたのだ。名取太郎が俺にお前の身体を託した。よつてここに、お前本来の肉体を返還する。」 「何だと・！では国衡、お前自身の身体は」 「名取太郎が身代わりになり、討たれた。俺の首は、今頃頼朝の酒の肴よ。」

兼任の魂は衝撃に揺れていた。まさかあの平泉が、滅亡の危機に瀕するとは。「俺に身体を返すだと・！ではお前は？なる。永劫たる幽閉の苦を望むか。」 「この国衡、残念ながら名取太郎のような鬼神ではない。見よ、今も仮の肉体居心地悪く、魂は彷徨っている・大河兼任という大器を御しきれねえのだ。」

「この兼任に、何ができるというのか？」 「泰衡は、一旦奥羽を頼朝に明け渡す所存。その後何が起ころのか見届け、思うままを行え。俺は、俺の首をここから探し出し、完全に奪還する。頼朝からも、名取太郎からもな。」

「チャ、チャンネルーラ：！」今純三は聞き覚えのある

名前に不安を感じた。黒い瞳を持たぬ娘は言う。「あんだ、森の真ん中で何もないのに独り、妙な仕草しては、狐に叫んでいる。さては、狐に抓まれてる・つまり、幻を見ているんだなとわかったのさ。」

ヤエトが眠りに落ち、人格の水面下に消えていく直前、次に目覚めるのがこいつだったら厄介だと呟いていた名前が、このチャンネルだったのだ。

「ま、幻、だと！」 はつとして、周囲を見渡すと、茅葺の家は消失し、兄の和次郎やトヨというあの謎の女、そして柳田國男のいた形跡も何もかもすつかり無くなっている。それほどばかりか、自分のいる場所自体、段々畑の広がる山村などではなく、青葉山の鬱蒼とした森の中に過ぎないのがわかった。

「何なのだ・今のほ。」 純三を得体の知れぬ恐怖が苛んでいた。ところが、何も見えなかったはずの女がこう言い出した。「何かが、あんだに見せたのよ。自分が持つている、記憶をね。」

「記憶・・だば今、起きていた事は」「過去に実際、起きた事よ。」 純三は手元にある私物を確認すると、すぐに愛用の画板に目を留め、あらためて掌で撫で感触を確かめる。「これか・東京は離れる時、兄貴に送られた。兄貴

が、全国調査旅行で使ったものだ。だばつて、そつた事が・まさか」 たった今、見ていた出来事が実際にあつた事だとするなら、兄達はある後どうなったのか？いや、調査旅行の後も、もちろん和次郎も柳田も異変なく健在である。ただ、兄は語らなかつたのだ。柳田國男の旅の真意も、トヨという不思議な少女の存在も。

「たかが木の板切れと、侮るなかれよ。」 急に、純三は飛び退いた。「お前・目が見えないんじや、ねえのか。」 「お前・目が見えないんじや、ねえのか。」

「ヤエトなどと一緒にしないで。私には誰にも見えない世界が見える。人の心、その過去、未来さえもね。」 「未来、だつて！」

「ともあれ、実に久しぶりの水上だよ。何かと姉妹らに難癖をつけられて、なかなか表に出られなかつたんだ。」 三十人の姉妹達に、人格が苛んでいた。ところが、復活を阻止されていた、というのか・この女、一体「どうも、奥羽の国はえらい事になっているようね。」

「・・んだようだな。巻き込まれる前に俺達は・」 「巻き込むのは、私よ。」 チャンルーラが何を言ったのか、わからなかつた。 「ここ、綾糟の森よね。もともと、あたしのだけだね。奴に会つて、今日こそは白黒つけなきゃならない。」 私達の、ではなく、あたしの、と言つたぞ・

「それに、トヨもね。あの女とも、決着をつけるよ。」

名取高館の皆はもうずっとと寝静まらず、若も既に目は冴えていた。幻影のような巨人達の姿を尻目に、奥州の兵士らは今日の戦闘の準備作業に動き始め、馬や人が草原を行き来し始めている。少女の背中ほどんど痛まず、やはり長らく感じた事のない健康の状態である事は間違いないように思える。本当にこれが、阿古耶という女性の力なのだとすれば・

若の姿を認めて、本吉四郎高衡が歩いてくる。「お加減は如何ですか。良ければ朝餉を召し上がられよ。その後で、森門へご案内致します。」 「森門？」

「ここ名取高館は、奥州における熊野の駅でござる。森の霊威が空間を綾取り、山と山の間に隠れた道を作っているのです。ここから貴女が望む場所まで、近くに森があれば瞬時に赴く事ができます。未来から乗っ

ていらした乗り物に戻られるなら鞭櫓の森でしょうが、問題はあの巨人らの動きです・」 「お待ち下さい。私に、逃げるとおっしゃるのですか。」

思いがけぬ少女の言葉に、高衡は目を白黒させた。「それでは、ここまで来た意味がありません。」 「そ、それは無論、忠衡に貴女の居場所を知られない為です。」

「有難う。でも、私の中には阿古耶というとても強い人がいて、私は・貴殿方の何か、力になれたらと強く願っているのです。」

「何を・貴女は、なさろうというのです。ここは戦場になるのですよ。危険な目に遭わせる訳にはいかない。」

若にも、わからない。自分に一体、何ができるというのか。だが、今私は独りではない。阿古耶はきつと知っている。 「あの、巨人のうちでも大きい方が、私の父です。」

そうやって空高く指差すと、若武者は目を剥いた。少女は悪戯っぽく笑み、兵士達の賑わいの中へ駆け出すのだった。 「朝餉を戴きましよう。おなか空きました。」

青葉山の山頂近く。芭蕉と壇憲家は驚愕していた。古代の石の建造物の残骸のようだった、大天狗の要塞の内部が、ひとつの小さな町のように整備されていたからだ。つまりは城塞都市で、石造りの外壁の内側は大小様々の瀟洒な木造建築がひしめき合い、道は迷路のように入り組んでいる。その多くは二階建てで、まだ活気はないがかなりの人数が起き出して、近隣の村人を相当収容している事が推測された。ここから数百年後の時代、

伊達政宗に招かれ芭蕉は一度だけ、仙台城本丸に足を踏み入れた事がある。まだ建築群は完成していなかったが、まさにここは今立つのと同じ場所に当たり、時を越えて建造物が呼応しているようにさえ思える。

「こりゃあ、平泉の・街並みを敷き詰めたような具合ではねえか。」 常陸坊海尊として、最盛期の奥州都市に入入りしていた憲家は、心底感嘆している様子である。案内人はいないが、後方を振り返ると先程門の外へ出てきて中へ招いた村人達がぞろぞろとついて来ている。 「ようこそ、綾糟の山城へ。」

若い、張りのある男の声が鳴り、建築群に反響した。歩いていった道の突き当たり一際大きく高い屋根と鳥居にも似た石の門があり、その前に仁王立ちして待つ者がいる。近づいてその顔をよく確認した二人は「あつ」と叫んだ。 「君は：守隅へ全克くん。」

蜂娘達の山で拉致されて以来、行方知れずだった水沢の青年銀行員が見た事もない、おそらくかなり古い時代の装束に身を包んで立っていた。 「あ：あて、るい：殿？」

芭蕉は思い当たって、躊躇いがちに呼んでみた。 「アテルイは、おらぬ。ここにおるのは、その末裔。我は、この山城の主、綾糟である。」

「な、なんと・」 アテルイの末裔に、大天狗綾糟が憑依している？一体、どういう事なのか。 「大天狗殿・貴殿様の、本来の御身体は」

青年の口を借りて、大天狗は言った。 「この若者、七百年後の我が転生した姿なり。」

二人は、守隅青年に導かれるようにその巨大な建造物の中へ進んだ。極めて美しい仕上がりで、天狗という名で連想するような、恐ろしげな者の住まう所には到底思えない。 「まあ、休まれよ。捕つて喰つたりはせぬ。」

「お宅のヤモリに捕つて喰われかけたがな。」 壇老人の皮肉に、守隅青年らしからぬ老獺な笑みがその顔に浮かぶ。芭蕉が口を開いた。 「拙僧どもは、誰一人この時代に『前世』を持たぬ故、未来から降りてくる事ができた・・そう思っていたが、違つていたのですな。守隅君の前世・即ち、大天狗綾糟殿がおられた。」

綾糟は応える。 「そうだ。この若者が降りてくるのを知り、我は悟つた。この天狗風情も、いずれ死ぬ事ができるのだと。」

「次回予告ー 大天狗、チャンネルラ、それぞれの思惑とは・・そしてすっかり放置された巨人達の行く末は？次回、遂に名取に開戦！」

シリーズ 遠野の自然

「遠野の立秋」

遠野 1000 景より

八月八日近辺は、二十四節気でいうと「立秋」である。外はまだまだ猛暑だが、季節は秋の開始を告げている。

関東地方の今年の夏は、長い大雨の季節を経て、例年より遅く到来し、一転、突然の猛暑に襲われたが、



斜陽になびく草



耳切山からの落陽



茅葺き屋根の家



鳥居



日没間際の太陽



麦の収穫

その変化は何と早いものかと思っただけだ。あまりの早さに身体の方が付いていけなかった。自然の揺さぶ

り攻撃を受けている感じがした。また、今年の夏の全国猛暑ランキングトップも、

日々入れ替わり、例年だと決まった顔ぶれであったが、今年は違った。気温トップが、北海道で

あったり、岩手の金石であったりした。あまりの驚きで、日本列島に何かが起きているのではないかと感じるほどであった。

しかし、さすがに八月に入り、特に夕刻から夜の時間帯には、確実に秋の気配を感じる季節となった。それが「立秋」という季節である。

短い夏のお祭り騒ぎもあつという間に終わり、何となく物悲しくなる季節である。

＊

季節の変化はまず、日差しに現れてくる。

真夏の太陽は、ただギラギラとしてまぶしいだけであり、陽のあたるところを焼き尽くしていた。

しかし八月の太陽は、特に夕暮れ時は、確実に秋の

気配をまとう。

ギラギラの度合いが、時間経過とともに急速に弱まっていく。そうした瞬間を捉えた写真が三枚もある。

満月と見紛うほどの日没の太陽。明らかに夏の太陽ではない。

「耳切山からの落陽」は、さらに秋の色を濃くしている。また、この景色は、かつて日暮れまで遊びまわっていた筆者の幼少時を思い起こして、特に印象深い。

「ダイヤモンド薬師岳」は、ダイヤモンド富士の岩手版といったところか。神々しい瞬間である。

「斜陽になびく草」は、まるで一面のすすきが原を想起させる。

「麦の収穫」は、米の収穫に比べて接する機会も非常に少ない。夏の収穫であ

ることをあらためて思う。

「茅葺き屋根の家」は逆に、日中の日差しの強さを思わせる。夏草も猛烈な勢いで成長している。放っておけば、すぐ草に覆われてしまう。

「鳥居」は、複数の木製

鳥居が林立していて、尋常ならざる景色。おどろおどろしい感じを受けるし、夜は遠慮したいと思うような場所。だが実際には、街灯はたくさんあるし、交通量も多く、近くには野球場、テニスコート、サッカー場

を備えた運動公園があるとのことだった。

このように、真夏と秋が混合し始め、次第に秋へと移行していく季節が「立秋」である。

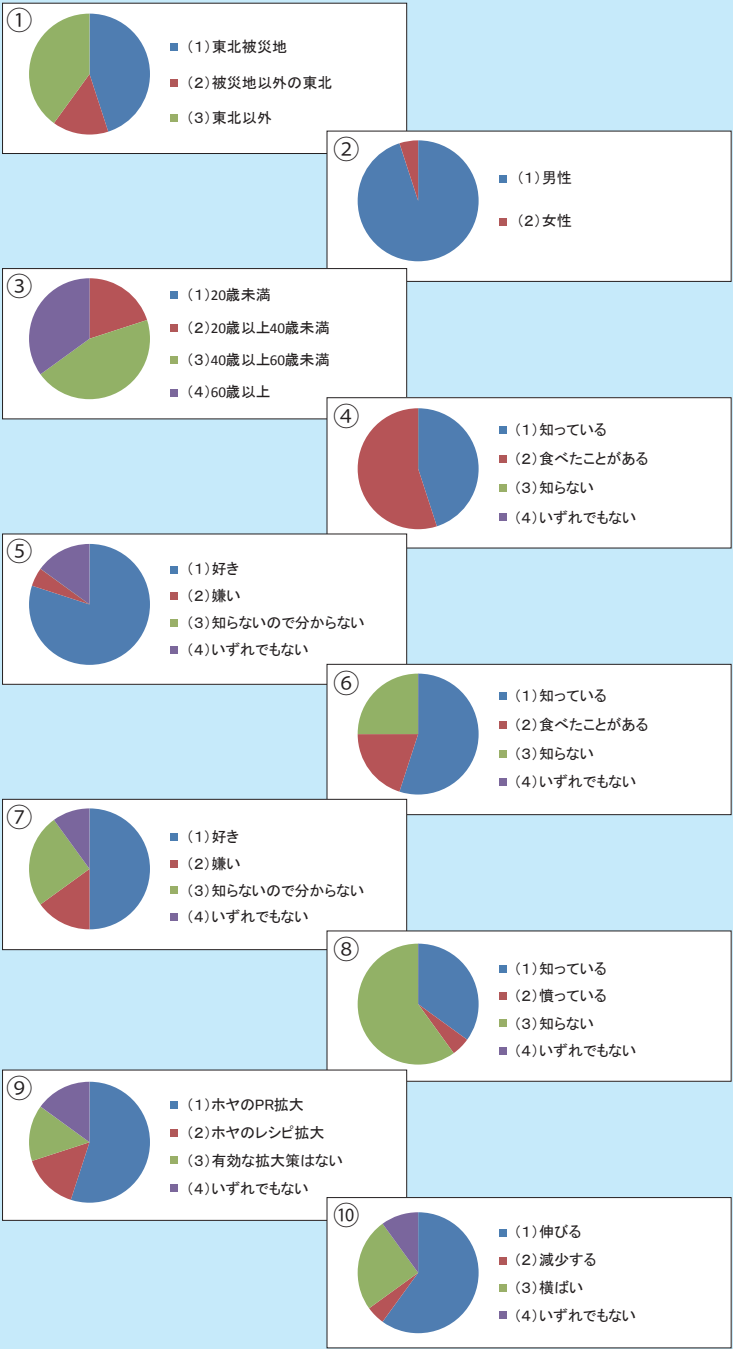


ダイヤモンド薬師岳

第 38 号 ネットアンケート集計結果

【三陸の珍味「ホヤ」について】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	9
	(2) 被災地以外の東北	3
	(3) 東北以外	8
②	性別	
	(1) 男性	19
③	(2) 女性	1
	年齢	
	(1) 20 歳未満	0
	(2) 20 歳以上 40 歳未満	4
	(3) 40 歳以上 60 歳未満	9
④	(4) 60 歳以上	7
	ホヤを知ってますか？	
	(1) 知っている	9
	(2) 食べたことがある	11
	(3) 知らない	0
⑤	(4) いずれでもない	0
	ホヤは好きか？	
	(1) 好き	16
	(2) 嫌い	1
	(3) 知らないので分からない	0
⑥	(4) いずれでもない	3
	ホヤの塩辛やバクライは知っているか？	
	(1) 知っている	11
	(2) 食べたことがある	4
	(3) 知らない	5
⑦	(4) いずれでもない	0
	ホヤの塩辛やバクライは好きか？	
	(1) 好き	10
	(2) 嫌い	3
	(3) 知らないので分からない	5
⑧	(4) いずれでもない	2
	韓国のホヤ禁輸措置を知っているか？	
	(1) 知っている	7
	(2) 憤っている	1
	(3) 知らない	12
⑨	(4) いずれでもない	0
	ホヤの国内消費を伸ばす方策は？	
	(1) ホヤの PR 拡大	11
	(2) ホヤのレシピ拡大	3
	(3) 有効な拡大策はない	3
⑩	(4) いずれでもない	3
	ホヤの国内消費は伸びると思うか？	
	(1) 伸びる	12
	(2) 減少する	1
	(3) 横ばい	5
	(4) いずれでもない	2



今回は【三陸の珍味「ホヤ」について】。三陸海産物のうち、珍味として知る人ぞ知るホヤについて聞いた。ホヤの国内消費は低迷するばかりで、他方、韓国等への輸出に頼らざるをえない構造のホヤ。「旬」といわれる夏なので取り上げた。回答者数は二十名。今回も被災地含め、東北居住者からの回答が過半を占めた。

「ホヤを知っているか」は「食べたことがある」が55%、「知っている」が45%で知名度はあることが分かる。「ホヤは好きか？」は「好き」が80%、「嫌い」は少ないが、「いずれでもない」の15%が気になる。「ホヤの塩辛やバクライは知っているか」は、ホヤに比べ、「知らない」が多く、知名度は劣る結果となった。「ホヤの塩辛やバクライは好きか」は「嫌い」が15%もいた。「韓国のホヤ禁輸措置を知っているか」は「知らない」が60%と驚きの結果、「知っている」は35%にとどまった。「ホヤの国内消費を伸ばす方策は？」は「ホヤのPR拡大」が55%、「ホヤのレシピ拡大」、「有効な拡大策はない」、「いずれでもない」が15%で並んだ。「ホヤの国内消費は伸びると思うか」は「伸びる」が60%、「横ばい」が25%、「減少する」が5%だった。この集計結果は、ぜひホヤ事業関係者の方々に見ていただき、今後の販売戦略に活かして欲しいと思う。

編集後記

今回号の目玉は何といっても福島県南沿岸部取材である。全八面中、福島関連記事に実に半分の四面を割り振った。

書き手は三名で、たまたま、いわき市、富岡町、楢葉町、広野町と一緒に取材する機会があった。

とはいえ、それぞれのアングルで書いたので、記事内容はかぶるところか、むしろ自然にこの地域が立体的に浮かび上がってきたのではないかと思う。

それにしても、福島に関するニュースはめっきり減少した。飽きっぽいのは、国民ではなく、マスメディアの方であり、福島を忘れない国民も多いはず。

取材中、そうした人々に、少しでもいまの福島をお伝えしたいという気持ちがふつと湧いてきた。ときには、怒りと共感と申し訳ない気持ちとが混在して、自分の立ち位置を何度も確認する必要に迫られた。

ともかく、情報は重要である。何も知らされなければ、その思考も影響を受ける。つまり「空白」となる。この福島問題は、永遠に「空白」にしてはならない。また、答えなど簡単に出ないことも再確認した。

やり場のない怒り、目先の生活問題、そもそも言いたくなる気持ち。これらにずっと付き合って行こうと思う。

「東北を世界に！」プロジェクト募集

・プロジェクト募集要領

- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由（プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思います）
- ④ ✕切はとくに設けません

「東北を世界に！」プロジェクト募集

・連絡先／企画提出先

（郵送） 〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1
ホームタウン宮前2-2
電子タブロイド新聞【東北復興】宛
（メール） yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

- ・ ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思います。（氏名公表か非公表かはご相談）

- ・ たくさんのご提案をお待ちしています